

大江戸・令和の大変

土方 環

以下は羽村古文書研究会の会報「古文書はむら」(第16号)から、著者の土方様(青梅市在住)の許可を得て転載させていただくものです。
(2020年5月14日 山口)

この世は将にコロナショック。かの著名なセレブの奥さん、お仲間と一緒に桜見物と太平楽をきめこんだ。これが夕刻のニュースとなって流れたからメディアは大騒ぎ、世間に違和感を与えた。続いてこの直後、お笑い芸人の関連死が、新聞の第一面を飾ったのも異常だ。

我が家においても、この夏五輪お目当てのドイツ人が、民泊する予定であった。いずこも同じ、それがキャンセルとなった。先方の様子を聞くと、町は死んだようだという。既に死者も出たとのこと。元々、欧米人は三つ

の無い、づくしがある。
一つには、ハンカチを持たない。二つに、手を洗わない。三つに、マスクをしない。これが普通の習慣である。そこで、ふと思ったことであるが、この病気の歴史をふり返ると、何か江戸時代のコレラ騒動によく似てはいないか。

兆候が出たのは、元禄期。一万人の死者が出た。それを「ソロリコロリ」といい、馬のお告げであると、ある浪人が小冊子を出版した。しかし、悲しいかな不要な風評を流布したかどで断罪された。

さて、その後のコロリ、一次、二次、三次と日本を襲った。その最初、文政五年のことである。同年八月長崎から上陸、西日本、近畿地方に広がった。人々はこれを三日コロリといつて、その感染力を恐れた。巷では、おまじないやら、お守りやらがはやり、次のような「〇〇急々如律金きゅうくによりつりよう」と書いたふだを下げて疫病神の退散を願った。古代律令の力が民間信仰には生きていたようだ。

民間療法とはいえ、ちよつと面白いものは、南天の実と梅干しを煎じて飲むと治るとか。はたまた百鬼夜行の「ぬれ女の絵」を掲げると、その魔力で逃げるとか、女強しである。次に大流行したのが、安政五年。江戸では、西国からの船は芝、鉄炮洲、佃島、霊岸嶋へと着船する。ここからコレラは江戸市中へと蔓延した。人々は嘔吐と下痢をくり返し、体が冷えてコロリと死んだ。患者は薬餌を求め先を争った。医師はカゴを飛ばし、西に東に奔走した。目にみえるようだ。

このときも又、疫病神退治と神輿を担ぎ、獅子舞をし、節分でもないのに豆まきし、正月でもないのに門松を立て、騒ぎたてた。他

方では、これは天狗の仕業だとハウチワを模して、八ツ手の葉っぱを吊して頼みの綱とした。

一方、乞食は知恵を働かせ、白い着物で頭に三角巾を付け、死に神スタイルで徘徊、金をせしめたとのこと。

という立派な碑が残っています。昔のはなし、腹痛の時はこの小石を借りて、患部をさすってなおしたという。いつの頃であつたか、市道改修の折、石碑の下を掘った。そしたら、ブリキ缶いっぱい平たい経典を書いた白い石が出てきたという。

当時としては、この方法しか治療法はなかったのである。八ツ手の木も、あちこちで見ることが出来た。なぜかじめくした裏手に植えられたが、その効能は知りません。

医学の未熟な時代、人々は迷信と呪縛のはざまで生きてきた。ところがである。四月のある新聞のスーパの折込みチラシに目が釘付けとなった。紙面いっぱい「当店は新型コロナウイルス感染症の一日でも早い終息を願ひ、厄除大師に祈念してまいりました。ご安心を……」となっているではないか。

疫病退散をまじめに社長名で出しているところが笑えない深刻さをあらわしているが、過去を振り返ると後世に教訓だけはしっかり残してきたように思われる。東北の巨大地震と巨大津波、四〇メートルの海水が山を駆け上がった。そのところに苔むした記念碑が建っているという。

せめて歴史学者たちが、声を大にして警鐘を鳴らしていたならば、あの原発事故は防げていたはずだ。又、今流行しているコロナ問題にしても、大江戸の大変に注目していれば、あれも足りない、これも足りないなどと、あ

わてる必要もなかったはずだ。
むなしさと悔いが残る。歴史はくり返す、である。

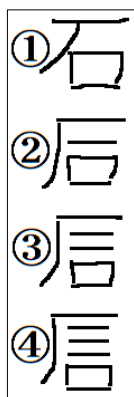
(注)「石典」の碑の「石」の字の実際の刻字は下図の③のようになっています。近頃の地藏院の老師によれば石の大きさにより、①は岩より小さく川石くらい、②は小石より一つ大きく中石、③は小石で手のひらに乗るおおきさ、④は砂利で砂より大きい、とのことです。この「石典」はいつ建ったか不明。地藏院は臨済宗建長寺派、体験的な考え方であるので宗教感があるものか、当時の僧侶があえて大石に小石を使う為にこの字を当てたと思われる。私共は石_{いし}経_{きやう}様と云って崇めてきた。昔は寺も医療機関で葬式仏教で無かったことが分かります。

①石 ②后 ③后 ④后



「石典」の「石」の字

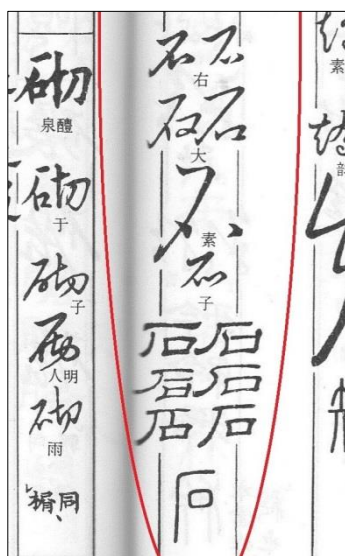
土方さんの「大江戸・令和の大変」の中に出てくる「石典」の「石」の字は③で、土方さんからは「石」には、②③④があると教えていただきました。図書館が休館なので家にある辞書やネットで少し調べてみました。



一、『異体字解説字典』（柏書房）に③の字が載っていました。意味は書いてありません。



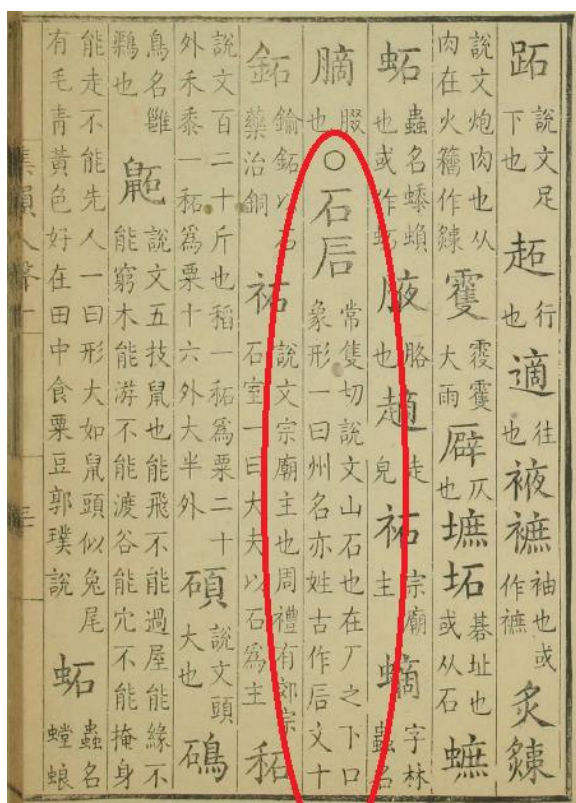
二、『五體字類』に、②の字が載っていました。意味は書いてありません。



三、『集韻』にある③の字（ネットで調査）

『集韻』は中国の韻書（一種の発音字典らしい）。十卷。宋の仁宗の勅命により、丁度（ていたく）らが撰。一〇三九年または一〇六六年成立。五万三千余字を二〇六韻に分け、「広韻」を増補・改訂したもの」とあります。早大古典籍にありネットから見られる。十巻もあるので探すが大変でした。十巻目に③の字を見つけました。但し説明文が読めません。土方さんの解釈を次頁に示します。

結局、④の字が載っている辞書類はなく、わかりませんでした。（山口）



石后

常隻切 説文山石也 在厂之下口
象形 一曰州名亦姓 古作后文十

石后常隻切

石后は常隻切に
割れた一片である。

やうと
読せし
んと読せし

至と
読せし

在厂之下口象形

厓にあつては下の穴地にヤ洛する
象形。

説文山石也

説文山は石そのものである。

中国に行つてみると石の山で
木が生えてない。

一曰州名亦姓古作后文

州名に又姓名にある
て古い作りは石の文字。